決戦の時

上

遠藤周作

決戦の時 上

江苏工业学院图书馆
藏书章

遠藤周作

講談社

決戦の時　上巻

一九九一年五月二〇日　第一刷発行

著者——遠藤周作

© Syusaku Endo 1991, Printed in Japan

野間佐和子

株式会社講談社

東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一一二—〇一

電話　出版部(〇三)五三九五—三五〇四
販売部(〇三)五三九五—三六二二
製作部(〇三)五三九五—三六一五

印刷所——株式会社精興社　製本所——大口製本印刷株式会社

定価——一三〇〇円（本体一二六二円）

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

ISBN 4-06-205038-2　(文 1)

目

次

跡目相続 7
藤吉郎 25
末森城 40
生駒屋敷 61
清洲 78
最初の踏石 99
兄妹 120
包囲網 137

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

女たち　156
兄弟相剋　173
義元の野望　191
信行の運命　207
美濃の義竜　224
岩倉攻め　242
嵐の前　266

裝幀　永原康史

決戦の時

上巻

跡目相続

末森城という城があった。

現在の名古屋市、千種区・田代町にその跡が残っている。一部には愛知学院大学の大学院が建てられている。

城といっても堂々たる天守閣を持つ江戸時代の城ではない。丘陵に砦をつくり麓に城主の館をおいた典型的な戦国時代の戦闘用の城だった。

四百四十年ほど前の天文二十年三月三日、ここで一人の男が息を引きとろうとしていた。織田信長の父親、信秀である。備後さまと呼ばれた男である。男の厄年は四十二歳というが、この時、彼も四十二歳だった。疫病にかかり、加持祈禱、医師たちがさまざまな手当てを行ったがその効もなく、今、息を引きとろうとしている。

城内の控えの間には続々と彼の一族や重臣たちが集まり、それぞれの思惑を胸にひめて、顔だけには沈痛な表情をうかべていた。

信秀は、もとは尾張の守護・斯波氏の代官の、そのまた家来にすぎなかったが次第に力を獲

得し、隣国の美濃や三河にまで転戦できるほどの勢力を築いた男である。
したがって彼の行動にはどうしても無理が生じた。強引さもあった。出る杭は打たれるの例の通り、一族のなかにもひそかに不平不満を持つ者もいたし、一応は服従した国人や地侍のなかにも虎視眈々として機を狙っている者もあった。
末森城の控えの間に集まった者はそんな本音をかくして、男の死をじっと見守っていた。
日が暮れかかった。信秀の弟の孫三郎信光が暗くなった控えの間の戸をあけて、
「ただ今、兄者、御他界」
とかすれた声で皆に告げた。
予期したことだったが、吐息とも溜息ともつかぬものが控えの間に拡がった。一同は立ちあがり、一族を先頭にたてて遺体のおかれた部屋にむかった。
五日後、信秀の四人の弟を中心に重臣たちが葬儀のこと、今後の仕置きのことを同じ末森城で談じあった。
だが奇怪なことにこの談合では信秀の正式な葬儀は三年後に延ばす、と決めた。
「御葬儀は取り行わず、両三年の後、これを行うなり、国中、風聞の取り沙汰あれど、某ども、その真意を知らぬなり」
と後に豊臣秀吉に従った前野一族の文書「武功夜話」では「その真意を知らぬなり」と奥歯にものの挟まったような言いかたをしている。
亡くなった信秀に子供がいなかったわけでもない。正式の嫡男は幼名：吉法師、現在十八歳の三郎信長である。彼には同腹の弟、信行をはじめ腹ちがいの兄弟、信広、信包、信治、信時、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

信興、それに妹のお市たちがいる。跡目をつぐ子供には不足してはいない。
だがこの夜、一門、重臣たちは葬儀を延期することによって故人の信秀の遺領をすべて委ねる人物を決めなかった……。なぜか。
そこから、この小説をはじめたい。
葬儀を行えば、当然、跡目を決めねばならない。
それが間近になった。
先にも書いたように信秀の嫡男はもちろん十八歳になる三郎信長である。彼には一人の兄がいるが、信秀庶子であって正統のあと継ぎではない。
だが一族の棟梁としての資格がこの青年にあるかどうかとなると一同、首をかしげた。
第一に粗暴な面が多い。しかも猿楽や歌舞にうつつをぬかし、遠縁にあたる織田七兵衛尉の住む岩倉城へたびたび遊行して共に歌ったり舞ったりしている。
更に行動に品位がない。町を通る時でも人眼はばからず柿や栗や餅をくらいながら歩く。人に寄りかかったりその肩にぶらさがったりする。
要するにいつの世にもいる作法知らずの遊蕩児にみえた。今でいえば盛り場のディスコで夜を徹して踊りまわっている世代の一人だと考えてよい。
そんな頼りない若者を一族の棟梁として迎えるわけにはいかない。
「それに引きくらべ、御弟の勘十郎殿は」
と評定の折も重臣の一人、林通勝が提案した。
「御幼少の頃より分別智慧のあられるお方。むしろ亡きお屋形の跡目にはこの信行殿こそふさ

わしいと存じまするが……」

談合の席ではこの意見に肯く者が多かった。それほど三郎信長の評価は芳しくなかった。

「だがそれでは筋目がたたぬぞ」

とこの時、口を出したのは信秀の弟、つまり信長の叔父にあたる織田孫三郎信光だった。彼は後にもたびたび信長に力を貸すようになる。

「何と申しても嫡男は嫡男。その嫡男をさしおいて、直ちに信行に跡をつがせば、家中に動揺不安も起る。場合によっては二つにわれぬとも限らぬ。三河、駿河、美濃のみならず、この尾張にさえもまだ敵の多き我らにとっては賢策とはいえぬ。されば……」

されば……葬儀をしばらく延ばし、一門、力をあわせて地盤を固めた後にゆっくり後継者を決めてはどうかというのが、孫三郎信光の意見だった。

それぞれに野心のある一族には棟梁を早く決めるよりは延期してくれるほうが有難い。

「葬儀は三年後に遅延いたしたい」

それが結論となった。

この談合には信長はもちろん、出席しなかった。五日前、父親の臨終と死を見守ったあと、信長は父から与えられた那古野（なごや）の城に戻っていた。そしてそのかわり彼の後見役・平手政秀が出席していた。

彼は会議のあいだ、ほとんど発言せず暗い顔をして正座をしていた。幼い時から粗暴だった吉法師（信長の幼名）の後見役を信秀に命ぜられた人物だけあって、政秀は謹厳そのものだった。

談合が終ると花曇りの空の下、政秀は那古野の城に帰った。当時の那古野城は現在の名古屋城のなかにあった。

「三郎さまは、鷹狩りに参られております」

と小姓の言葉を耳にすると政秀は不機嫌に顔をしかめた。三郎さまとは信長のことである。父の信秀が他界してまだ六、七日にもならぬのに信長は既に鷹狩りに出ている。本来ならば身を慎み、喪に服さねばならぬ日々なのである。

苦々しい表情で控えの間に端座した政秀は二時間ほど信長の帰還を待たねばならなかった。

やがて——

大きな足音が黒光りのする廊下の向うから聞えた。信長が帰城したのだ。

「お戻りでございますか」

と政秀は手をついた。

湯帷子(ゆかたびら)の袖をなおし、汗まみれのまま青年は政秀の前にどっかとあぐらをかいた。

「末森のお屋形さまが亡くなられて、まだ七日もたっておりませぬが……。喪のさなかに鷹狩りのごとき殺生、如何かと存じます」

政秀は、いつものように訓戒をのべた。それがまるで毎日の癖のようになっていた。

返事はない。黙って政秀を見つめている。それがこの細面の青年の政秀への態度だった。政秀はそのたびごとに何ともいえぬイライラとした感情を抱く。

(若殿は何を考えておられるのか)

彼にとって世代の差、年齢の差をこれほど感じさせる相手はいない。政秀のような年輩から

見ると無軌道で作法も心得ず、それをいかに教えても守ろうとしない。政秀には二人の子がいて、いずれも信長とほぼ同じ年齢だったが、信長よりは分別もある。作法も心得ている。
「棟梁におなりになるためには重みがなければなりませぬ。重みがなければ家臣おのずから侮りを受けます」
政秀は、この能面のように無表情な顔をした青年にいつもと同じ訓戒をたれつづけた。青年はこの後見役の意見を無視したように、途中でその意見を遮り、
「御葬儀の日どりは」
とたずねた。
「御葬儀……両三年、延期となりました」
「なんと」
はじめて信長の感情のない顔に驚きが走った。
「叔父上たちも末森城の重臣もそれに賛同したのか」
「御賛成にございました。おわかりでございますか。若殿には棟梁たるべき御仁にあらず、両三年まって相応しきお方に御成長の暁、御父上の御葬儀と跡目の御相続を致そうと申すのが御一門のお気持にございます」
信長は政秀の顔を凝視してしばらく考えこんでいたが、
「談合の折、誰がとりわけ葬儀の日取りについて口を出されたのか」
「信康さま、信広、信光さま、信次さま、御叔父さまたちすべてでございます」
すると叔父たち全員が信長を織田家の総大将としたくないわけか……。

政秀を邸に帰したあと、三郎信長は孤独だった。今更のように自分が父の信秀の庇護のもとにどれほど大事にされていたかが、しみじみわかった。

父、信秀はその一生を戦にあけくれたが、功名があがればあがるほど、織田の姓を名のる一門に嫉みと敵意を持たれるようになっていた。

もともと織田家は尾張にあって実に複雑な家系で、同じ姓を持ってはいるが上の郡（丹羽、葉栗、中島、春日井）を支配する岩倉城の織田伊勢守と、下の郡（海東、海西、愛知、知多）を知行する清洲城の織田大和守とに分れていた。

この大和守の三奉行の一人が信秀であって、それにも四人の弟がいる。網の目をはりめぐらしたように右をむいても織田、左をむいても織田を名のる遠縁つづきの家が尾張の狭い土地を奪ったり奪りあいをしているのだ。

しかし父の信秀はそのなかで頭角をあらわし、勝幡とよぶ豊かな貿易港を根じろにして財をつくり、ぐんぐんと勢力を伸ばした。そしてその力に守られて子供の信長もかなり勝手で我儘な毎日を送ることができた。

だが——

もう今は違う。

政秀の報告を聞いただけで信長は一門から自分が軽んじられていることを知った。

「重みがない」

と政秀は言ったが、それは武将として身につけねばならぬ作法のすべてを青年の反抗心から無視した結果によるのだろう。

だが、それよりも信長に衝撃を与えたのは、
「葬儀を三年も延ばす」
という一門、重臣の決定であり嫡男たる身にとって言いようのない屈辱であった。いわば信長には現在のところ相続の資格なしという宣言だからだ。
いや、それは、一門の本心を曝けだせば、
(両三年のあいだ一門のなか、力において勝った者が信秀の所領地を支配しても差し支えなし)
という申しあわせとも受けとれるのだ。
(周りはことごとく豺狼か)
父の遺領を狙うのは隣国の今川や斎藤だけではない。山犬や狼は血のつながる叔父たち、遠縁の一族ことごとくそうなのである。
(誰も信じられぬぞ)
信長は燭台の炎を眺めながら叔父たちや一族の顔を思いうかべた。
昨日までは——
親しみを持って話しかけてきた顔。
親者味方のように近よってきた顔。
信長の我儘をも笑って許してくれた顔。
それらすべての顔が父・信秀が死んだ時からその仮面をかなぐり捨てて、本性と欲とをむき出しにしようとしている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.